

したがって、国境画定についても、当の南米各国はもちろん、第三国の思惑もからんで、複雑な問題があった。さらに、フォーセットには、祖国イギリスの国益という問題もある。その後、フォーセットが探検に出て消息を絶った時も、「ブラジル駐在のイギリス情報部のスパイとして、密林の中の秘密基地から定期的にロンドンの外務省へ無線で報告をおこなっている」と、他国からスパイ視されたほどである。

しかし、この委員長辞職は、天才肌のフォーセットにとって、心にボツカリ穴があくような気持ちだった。この穴を埋めるものは、彼がブラジルとの関係が深くなるにつれて、確信を抱くようになったある仮説を、探検によって実証して見せること以外にはなかった。

その仮説とは、「ブラジルには、人類最初で最大の文明の跡が実在している」ということであつた。

そして、この時、フォーセットの頭の中に鮮明に浮かんでいたのは、ラポソ一行が発見した、あの山腹の古代都市と、不思議な文字を刻みつけた板石でふさがれた洞穴、そしてまた、山麓さんろくの川に舟を漕いで現われたという、あの二人の「白い肌

の土人」であつた。

フォーセット大佐は、「失われた古代都市」の位置を、アマゾンの支流タパジヨス川とシンダ川の上流地帯、クヤバの北方あたりと考えた。

一九二五年二月、大佐、長男ジャック、その学友ラリー・ライメルの三人はインディオを二人つれ、サンパウロからマトグロッソ地方に入つて行った。そこはまさに時間の流れからとり残された「前史時代」であつた。

密林の中には、動物学界にまだ知られていない、イヌともネコともつかない動物がいた。マデイイ川流域の沼地には、太古の生物の生き残りらしい、正体のわからない巨獣が浮き沈みしていった。

人間の方も、まるで未知の人種展覧会のようなつた。白色人種けつしきよの穴居人がいた。毛だらけの巨軀きよくで全裸、異常に長い手で、うなりながら踊る、類人猿としか思えない種族もいた。また、太陽が昇るとき、美しい合唱でこれを迎える、高度文明の名残をとどめているような人種もいた。

フォーセット大佐一行は、こうして、「セラ・ド・パリマ」——「パリマの内海」と呼ばれる地